

交通運輸の移り変わり

<明治期・大正期・昭和前期：1880年代～1945年>

[陸上の交通]

1 明治期の道路

増毛の街中の道路が現在のように整然とした区画になった基盤は、明治13年(1880年)永寿町1丁目より出火して百余戸を廃虚にした翌年、市街の区画を設計して道路幅を10間とし、別に幅員13間の三大火防線を造りました。

[まめ知識]

◎三大火防線とは(現在)

第1火防通(役場～海岸通線：ぐるめ食品横)、

第2火防通(国道バイパス～アップルハイヤー)、

第3火防通(セブンイレブン横～北日本水産物株式会社まで及び現国道の一部)

明治26年(1893年)、増毛と留萌間の道路が整備され、馬首に鈴を付け、ラッパを吹きながら客馬車が通るようになりました。冬季より雪解けまで、馬車は馬ソリに代わって、大吹雪でもない限り日々運行されていました。これが当時唯一の交通機関であり、人々によく利用されていました。

2 鉄道開通

大正10年(1921年)11月に増毛・留萌間に町民待望の鉄道が開通しました。留萌・深川間は、すでに明治43年(1910年)に開通しており、増毛・留萌間の工事は、大正6年(1917年)に始まり、開通までに4年7ヶ月を要しました。



増毛駅構内(昭和30年)

3 海運業

増毛では鯨の角網経営の有力者達が海運にも乗り出し、それぞれ数隻から2、3艘の自家用の汽船、またはチャーター船を擁して活躍しました。これは、他町村に比を見ない異色のことでした。その他に船問屋、回漕店、運送店の営業を行う者は多く、業績を挙げ活気に満ちていましたが、戦時期の昭和18年(1943年)企業統合令によって、一路減少を辿りましたが、戦後はあらたに復活した会社や企業、組織がありました。

■ 明治初期からの海運業

<創業明治時代>

- ・小林吉三郎回漕店
- ・出雲初五郎運送部
- ・屋敷仁作回漕店
- ・増毛運送店
- ・川尻長太郎運送店
- ・高橋孝太郎運送店
- ・種村得三運送店
- ・増毛共同運送会社
- ・天塩国北見漕運会社
- ・本間合名会社海運部
- ・小野寺喜兵衛回漕店
- ・村名回漕店
- ・竹内回漕店

<創業大正時代>

- ・増毛運送株式会社
- ・山本汽船回漕店
- ・○天運送株式会社
- ・海陸運送増毛支店
- ・斉藤民蔵運送店
- ・三里商会海運部

<創業昭和時代>

- ・増毛共立運送部
- ・雄冬海運株式会社
- ・道北貨物自動車増毛営業所
- ・高橋運送店
- ・佐々木運輸株式会社
- ・花田直太郎回漕店
- ・日本通運株式会社増毛営業所
- ・南天塩通運株式会社
- ・岡田運送店
- ・増毛海運合資会社
- ・増毛共同運送店
- ・沖田運送店
- ・増毛通運株式会社

[海上の交通と運輸]

1 沿岸海運

増毛に定期便が開かれたのは、明治16年(1883年)5月で共同運輸株式会社が始めました。その後、明治18年(1885年)10月には共同運輸会社と三菱の共同で開設した日本郵船が小樽を根拠地として小樽、増毛間及び利尻、礼文、宗谷、焼尻島までの航路を開いています。

明治20年(1887年)頃の増毛は、市街地形成以来10年ほどが経過し、戸口約398戸、人口約2,200人で小樽以北唯一の良港湾を持ち、天塩、宗谷沿岸第1の都邑で7町5村を包括していました。

2 増毛の汽船保有海運業者の系譜

増毛には漁業経営で汽船を所有する者が他町村に比べ多く存在しました。最初に汽船を保有し、海運業を開いたのは、小林吉三郎でした。同人は伊達家漁場漁夫より身を興し、明治11年(1878年)独立し弁天町に廻船問屋を開きました。

明治22年(1889年)5月には、小樽の藤山要吉、麻里英三などの協力のもとに「天塩北見漕運株式会社」を創立し、初代社長として本社を増毛に置きました。その後、北海道庁から補助金を得て、新たに稚内、網走間の定期便を請負ましたが、冬季間の就航は難しく、その後経営不振となり明治30年(1897年)に解散し終末を迎えました。

これに代わり沿岸の海運に寄与したのが丸一本間泰蔵です。明治8年(18

75年)小樽より増毛に来住し、のちに天塩国第1の事業家、資産家となりました。その後、本間合名会社は「増毛丸」「天塩川丸」など数隻を所有し、佐渡や樺太をはじめ本道西海岸より東海岸までの海域に就航させ、乗客と物資の回漕にあたっていました。

第1次大戦時には、阿分の相馬留吉、田中平助並びに礼受の関長吉の3人による共同出資で「三星商会」が海運業に乗り出しています。その他、山本徳次郎が汽船「海竜丸」を所有し、山本汽船部として一時営業し、増毛と雄冬間の定期航路便を最初に開設しました。

昭和8年(1933年)より花田直太郎が増毛・雄冬間の定期航路を開きました。昭和32年(1957年)には、雄冬海運株式会社となり本社を雄冬に置き、雄冬地区住民のみが株主で当時道内でも珍しい一村一会社でありました。

<昭和後期(戦後)～:1946年～>

[陸上の交通]

1 幻の国道

開拓時代は、各地の交通を可能にすることを基本方針とし、実施機関である国費工事派出所が明治35年(1902年)に札幌・室蘭・網走・釧路・河西と並んで増毛(増毛・宗谷支庁区域内担当)にも設置されました。

大正9年(1920年)4月に準地方費道107路線の一つとなり、昭和28年(1953年)に「二級国道231号線」として初めて国道に認定されました。昭和40年(1965年)には新道路法が改正され、「一般国道231号」との名称となりました。最初の暑寒別橋の架橋が明治10年(1877年)9月であったことから、いかに増毛が北海道開拓の重要な拠点の一つとされていたことが窺うことができます。

構想自体は、明治40年(1907年)から存在した国道231号でしたが、不通区間の工事が始まったのは、昭和33年(1958年)で、北側は北海道開発局留萌開発建設部が別荘で着工し、南側は5年遅れの昭和38年(1963年)に同局札幌開発建設部が旧厚田村大字安瀬で着工しました。

2 国道の開通

着工以来22年の歳月が流れ大別荘・雄冬間の大工事は、事業費148億6千万円をかけ、昭和55年(1980年)に仮開通を果たしました。

最後の不通区間、雄冬・千代志別間の工事が完成し、札幌までの全路線が開通したのは、昭和56年(1981年)11月でした。計画から開通まで実に70余年もの歳月を経過した国道231号は、長い間、地図上にしか存在しない「幻の国道」でした。しかし、わずか40日後に大規模な崩壊性地滑りが雄冬岬トンネルを襲い、覆道は破壊され、その後、懸命な復旧工事が進められ、昭和58年(1983年)12月に再開通を果たしました。

また、大別荘・歩古丹の通年開通をめざす新路線は4本のトンネルと9つの橋で構成され、昭和58年（1983年）から工事が始まり、約180億円の事業費で10年の歳月をかけて平成4年（1992年）に完成し、約5.4kmの距離が短縮されました。



昭和56年11月：国道231号開通式

3 国道の改良

多額の費用と長い歳月をかけ、全線が開通した国道231号は、その後も改良工事が続いています。

平成8年（1996年）2月の国道229号の豊浜トンネルでの岩盤崩落事故が発生し、国道231号でも覆道の対策工事が行われました。

日方泊覆道と歩古丹トンネルの間でも地滑りなどの危険性もあることから「日方泊トンネル」の建設工事が始まり、平成17年（2005年）に完成をしました。

2代目の暑寒橋は、昭和2年（1927年）のコンクリート製で、老朽化に加えて幅4メートルと狭く大型車両1台が通行できる程度でしたが、昭和45年（1970年）から2年計画で1丁目に架け替えられました。

平成6年（1994年）から増毛バイパス工事が始まり、平成9年（1997年）12月に供用が開始されました。

旧朱文別地区では、道路護岸を超えた波が道路や走行車両に降りかかることから、平成元年（1989年）に波しぶき解消のための消波ブロックが約280個投入されました。



旧暑寒橋と増毛市街

平成12年（2000年）には、長さ160メートル高さ5.4mの「越波防止柵」が設置されましたが、越波を防ぐ抜本的な解決にならず、海岸管理者の留萌土木現業所へ要望し、沖合100メートルに離岸堤を設置することになり、平成14年（2002年）から工事が始まり、平成20年（2008年）に工事は終了しました。

4 道路交通

陸上における公共交通の始まりは、増毛・留萌間の客馬車の往来が始まった明治26年（1893年）でしたが、昭和の時代になっても運送・農耕などの動力は依然として馬が主力でした。昭和27年（1952年）には羽幌町に留

萌地域を運行区域とする「沿岸バス株式会社」が設立されました。また、昭和58年（1983年）5月から大別荘・雄冬間に1日3往復のバスが運行された。

昭和48年（1973年）、町内に初めて信号機が設置され（現シンコウ石油所在の交差点）、翌昭和49年（1974年）7月には当時の舎熊小学校前に押しボタン



冬季間の排雪作業：昭和40年代

式、8月には旧北洋銀行増毛支店所在の交差点にも設置され、町内に入り込む車両の増加に伴う交通安全対策が必要となっていました。

5 国鉄からJRへ

鉄道網は、太平洋戦争まで運輸の主力でありましたが、戦後の道路整備と急速な自動車の普及により旅客貨物の輸送割合に変動が起きてきました。

全国的な鉄道の衰退が続く中、国鉄の経営改善目標が掲げられ、全国の赤字ローカル線廃止が打ち出され、合理化が進む中で昭和55年（1980年）10月のダイヤ改正で、深川・増毛間の「急行ましけ」が上下2本廃止され、昭和59年（1984年）2月からは留萌本線の切符販売駅が留萌駅だけとなり、増毛駅は無人駅になりました。

国鉄の分割民営化により、昭和61年（1989年）11月に「北海道旅客鉄道株式会社」が設立され、JR北海道が誕生しました。

6 増毛駅

開業は大正10年（1921年）11月5日で、営業範囲は旅客・荷物・車扱貨物でしたが、昭和53年（1978年）10月に車扱貨物の取扱が廃止されました。

かつては、お盆が過ぎた8月下旬から澱粉工場への出稼者の布団や荷物の取扱が多くありましたが、昭和50年（1975年）頃から工場から直接トラックで荷物を運搬するようになっていました。

貨物ホームの吹き抜け倉庫は鯉豊漁時代には手狭なほどでしたが、昭和45年（1970年）に解体されました。その後、貨物ホーム自体も不用となり、昭和53年（1978年）に撤去され、翌年には敷地4,500㎡が払い下げられました。

貨物取扱廃止後は、小荷物扱いの贈答用りんご発送が駅の主な収入源となりました。

駅舎は大正10年（1921年）の建設後、増改築は行われていません。

増毛駅の入場券ブームは昭和48年（1973年）から始まり、開業60周年記念入場券が発売された昭和56年（1981年）11月には月間最多（当

時)の14,730枚の販売を記録しました。その後もテレビ番組でも紹介されたほか、昭和56年(1981年)の東宝映画「駅・STATION」の上映後は、全国各地から入場券を送ってほしいとの申込みがあり、対応に追われましたが、昭和59年(1984年)2月から増毛駅は無人化となり、乗車券は車内で購入するようになりました。



賑わう増毛駅:昭和40年代

[海路の交通]

1 雄冬航路

雄冬住民が株主となり、昭和32年(1957年)に設立された雄冬海運株式会社は、増毛・雄冬間の定期船を運航しました。通常は一日一往復の運航でしたが、7・8月に限り2往復し、この期間内にチャーター船として別に運航して3往復したこともありました。一方、冬季間は欠航となる日も多く、地域住民の生活にも大きな影響を及ぼすこともありました。

昭和55年(1980年)11月に国道231号の雄冬・大別荘間が仮開通したことにより、食料品や生活必需品は国道を利用した陸上交通へ変わりました。その後、平成4年(1992年)4月30日をもって雄冬地区住民の足となり、生活を支えた雄冬航路は国道231号の通年通行を前にして、その歴史を閉じました。

[港湾・漁港]

1 増毛港

<明治期・大正期・昭和戦前>

増毛港は、古くから近海航路唯一の避難港として認知され、明治15年(1886年)には「渡航者上陸港」に指定され、北海道への移住者はここから沿岸各地へ分散したといえます。

増毛港建設運動は、明治33年(1900年)より国会への請願と共に町民挙げての運動が進められ、明治40年(1907年)より「増毛築港鉄道期成同盟」をつくり、町独自の補足事業計画を策定していました。しかし、先鞭をつけた留萌町と競願となったため、2町でこれを巡って熾烈な争奪戦が展開されて、明治42年(1909年)第26帝国議会で留萌に軍配が上がるまでの長い期間の競争がありました。

増毛が国費導入による築港計画を断念し、起債によってまで漁港建設を決意したのは、大正8年(1917年)4月に鯨漁の中、突然の強風と激浪のため多数の桝船が破碎沈没し、多くの死傷者を出す大惨事が起こったためでした。

その後、港の整備は、大正15年（1925年）からの北防波堤工事に始まり、昭和10年（1935年）より10トン型の小型漁船を対象とした船入澗を計画しました。現在の西防波堤の基部となる防波堤が昭和14年（1939年）から昭和19年（1944年）にかけて施工されました。

<昭和戦後～現在>

増毛港は、国土交通省が管轄する地方港湾です。昭和54年（1979年）には、漁業者の交流を図るため、「漁村総合センター」が落成しました。

旧中歌海水浴場の埋立て工事は、昭和53年（1978年）から2ヵ年計画で実施され、公有水面を埋め立て後は、コンクリート広場が完成し、町営碎石場で生産される中割石の備蓄が行われました。その後も中央埠頭造成、物揚場岸壁造成など港湾整備が進められ、増毛港は時代とともにその姿を大きく変えてきました。



2 マリントウンプロジェクト

増毛港は、平成元年（1989年）に運輸省（当時）から『マリントウンプロジェクト』（以下MTP）のケーススタディ港に指定されました。

MTPの一環として、平成4年（1992年）に計画されたのが、プレジャースポット（以下PBS）の整備です。増毛港内中歌岸壁の一角の遊休施設を整備してプレジャーボートを係留させるもので、本格的マリナーの建設には多くの費用を要しました。

国の直轄事業として建設されたのは北海道では初めてであり、関係者の関心を集めました。平成6年（1994年）に運用が開始され、PBSの愛称はフランス語で“北”という意味の“ノール”という言葉が使われ「ノールマリナー」とされました。



ノールマリナー

3 雄冬漁港

昭和26年（1951年）に第4種漁港として指定され整備が進められてきました。雄冬漁港の整備前までは、浅海のウニ、アワビ、昆布などの資源が豊富で、沖合は天然礁のため、カレイ、タコ、ソイなどの好漁場となっていたこ

とから古くから漁業が盛んでしたが、荷揚げする港がなく、水揚げされた魚を沖合で運搬船に積み替えて輸送していました。国道231号の通年通行が可能になったことから漁業生産物の流通形態が変化し、これを契機に既存漁場の開発と合わせ、増養殖事業など高度利用を図るとともに沖合漁業の基地と避難港として重要な役割を担っています。



雄冬漁港

4 岩老漁港

昭和26年（1951年）に第1種漁港に指定されました。陸地から約100メートル離れたカクキの島が防波堤とつながって天然の防波堤の役割を果たしている特徴ある漁港で、鯨漁衰退後はカレイ、タコ、ウニ、アワビの水揚げに活用されています。

カクキの島は、風化によって岩盤の亀裂が発生し、平成20年（2008年）から岩盤の除去工事が行われ、漁港内の安全性の確保が図られました。道内各地の漁港では、平成12年（2000年）からプレジャースポット有料利用の受入れを始めていましたが、増毛町内の漁港では、平成16年（2004年）から岩老漁港のみ受入れを始めました。



岩老漁港

5 別苺漁港

昭和26年（1951年）に第1種漁港の指定を受け、昭和33年（1958年）に漁港整備が着工され、防波堤、岸壁、船揚場、物揚場などの整備が進められてきました。カムイエト岬など自然景観が美しい雄冬海岸の北側に位置し、ローソク岩付近の天然の入り江を利用して漁港が造られました。



別苺漁港

別苺漁港では、漁民が中心となり全員で別苺漁港利用組合を組織して漁港の清掃活動を行ってきましたが、その活動が昭和55年（1980年）に漁港愛護優良団体として北海道漁港協会から表彰されました。

6 阿分漁港

阿分一帯は、波打ち際の波が高く、干潮時には船外機が通れなくなるほど浅海で、採掘工事が行われるほどでした。出漁に際しては、自然の前浜を利用するしかなく、出漁時には陸揚げした船を巻き下ろししなければならず、冬期間は強風の影響を受け、相当穏やかな日でなければ出漁できませんでした。

昭和58年（1983年）に阿分漁港建設期成会が組織され、早急な漁港整備を求め、昭和61年（1986年）に新規漁港として指定を受け、その後漁港整備が進められてきました。



阿分漁港

教育・文化の移り変わり

[公立学校の設立]

1 明治期の教育

明治の初期には、舎熊、別荘、岩尾の各地に私塾や寺子屋が開かれていました。

北海道教育史によると明治10年（1877年）9月、民家を借りて仮教育所とし、村民協議費をもって経営費を支弁した。明治11年（1878年）、村民は197円余を拠出し、弁天山の上に校舎の新築工事を起こし、同年11月に落成した。敷地450坪でそのうち257坪は村民の寄附によるものであったと記されています。

増毛小学校の沿革には、この明治11年（1878年）11月の校舎新築工事落成をもって、創立、開校と記録したと思われます。

明治初期の増毛地方は、管内では最も進んだ文化をもち、教育に熱意を示す住民であったかが推察できます。

○ライマンの紀行より

開拓使の鉱山技師のライマン（アメリカ）による明治7年の紀行に「留萌の駅はさほど大村にあらず、増毛は大村にて、その宿は最も美しく北海道で目撃したるものの中で最たるもの。且つ、その住民、外国人を珍しく思うの情もすこぶる多し。その情たるは、おそらくその教化の稍厚きと、住民の知識稍進むにより起これるならん・・・」とあります。小学校についても、札幌ヲ出発シテヨリ小学校設アルハ、此地ヲ以テ初メトス・・・」と記されています

2 教育委員会の発足

昭和27年(1952年)10月に第1回の教育委員選挙が実施されました。

その後、昭和31年(1956年)6月、教育委員の公選を廃止し、教育委員の選出は、地方公共団体の長が議会の同意を得て任命することになりました。

増毛町教育委員会は、それまでの増毛町公会堂から昭和44年(1969年)7月に町総合庁舎に移転し、昭和48年(1973年)には、町立体育館が完成し、社会教育係を体育館へ一時移転しました。昭和52年(1977年)には、文化センターに教育委員会事務局が移り現在に至っています。

3 スクールバスの運行

昭和54年(1979年)以前は、信砂地区で町の医療バスを児童生徒の登下校の時間帯に利用されていましたが、本来の通学目的としていなかったため、利用者は少なく、路線バスを利用している別荘、阿分、舎熊、古茶内、箸別地区の子供たちにはバス代の一部を通学補助として支援していました。

昭和54年(1979年)、町はスクールバス1台を購入し、以降4台のスクールバスを購入し通学の利便性を図っていました。

昭和62年(1987年)から、スクールバスの運行を民間バス会社へ委託しました。平成5年(1993年)には、町所有車の老朽化により減車し、委託会社のバスと併用運行となり、学校の通学、保育所幼児の送迎、学校行事、スポーツ少年団活動、社会教育活動に広く利用されています。

[小学校・中学校・高等学校の沿革]

1 増毛小学校

年	代	出来事
明治11年	1878年	弁天山の上に40坪の校舎を新築し、増毛教育所として発足
明治13年	1880年	校名を増毛学校と改称
明治16年	1883年	稲葉町3、4丁目(現在の巖島神社のところに)移転
明治19年	1886年	小学校令で増毛小学校となる
明治26年	1893年	弁天町4丁目(現在の役場庁舎裏)に新校舎が建てられる
明治30年	1897年	増毛尋常高等小学校と改称
大正4年	1915年	校章と校歌ができる
昭和11年	1936年	現在地に校地移転と新校舎落成
昭和22年	1947年	新学制により増毛町立増毛小学校と改称
昭和28年	1953年	開校75周年記念で、当時道内では札幌に1台あるのみの山葉グランドピアノが寄贈される

昭和43年	1968年	完全給食実施
昭和53年	1978年	開校100周年記念式典挙行
平成元年	1989年	空き教室を活用して、「増毛歴史の部屋」を開設
平成13年	2001年	北海道遺産の指定を受ける

2 別荘小学校

年 代	出 来 事	
明治15年	1882年	それまでの寺子屋の生徒の増加によって、萌に仮校舎が建てられる（別荘小学校の創立）
明治24年	1891年	谷地町に校舎が新築
明治29年	1896年	別荘尋常小学校となる
明治34年	1901年	オタルマナイに移転増築
明治39年	1906年	失火全焼
大正13年	1924年	高等科を併設し、別荘尋常高等小学校となる
昭和22年	1947年	新学制により増毛町立別荘小学校と改称 増毛第一中学校別荘分室が併置される
昭和25年	1950年	増毛第一中学校別荘分室が別荘中学校となる
昭和33年	1958年	別荘中学校と増毛第一中学校が統合して増毛中学校となる
昭和35年	1960年	校舎二棟が全焼
昭和40年	1965年	鉄筋コンクリート校舎に改新築
昭和57年	1982年	開校100周年記念式典挙行
平成7年	1995年	コンピュータールームが完成
平成11年	1999年	開校120周年記念式典挙行・タイムカプセル埋設

3 舎熊小学校

年 代	出 来 事	
明治16年	1883年	増毛小学校舎熊分校として、中川徳次郎宅を借り受けて設置
明治26年	1893年	独立して公立舎熊簡易小学校となる。10月、舎熊村に新校舎建設
明治28年	1895年	舎熊尋常小学校となる
大正9年	1920年	新信砂に新信砂分教所を設置
昭和22年	1947年	新学制により増毛町立舎熊小学校と改称 高等科は廃止され、増毛町立増毛第二中学校に編入

昭和37年	1962年	体育館改築落成
昭和41年	1966年	鉄筋コンクリート校舎改築第一期工事完成
昭和42年	1967年	同上 第二期工事完成
昭和58年	1983年	開校100周年記念式典挙行
平成15年	2003年	開校120周年記念式典挙行

4 阿分小学校

年 代	出 来 事	
明治16年	1883年	阿分村栖原角兵衛の一漁舎を仮校舎に充用し、増毛小学校阿分分校を開校。場所は、タントシナイ河口右岸、現校舎西南の窪地
明治22年	1889年	新校舎落成（現校舎西北部）
明治26年	1893年	増毛小学校より分離独立して阿分簡易小学校となる
明治34年	1901年	阿分尋常小学校となる
明治44年	1911年	阿分尋常高等小学校となる
昭和22年	1947年	新学制により増毛町立阿分小学校と改称
昭和38年	1963年	新体育館落成
昭和41年	1966年	自校給食による完全給食を開始
昭和57年	1982年	新校舎落成
昭和58年	1983年	開校100周年記念式典挙行
平成15年	2003年	開校120周年記念式典挙行 北海道開発局道路功労賞受賞

5 信砂小学校

年 代	出 来 事	
明治33年	1900年	民家を借り受け簡易教育所を設置
明治35年	1902年	尋常小学校設立の認可を得て、小野寺喜兵衛の寄附に係る校地に校舎を新築
昭和14年	1939年	校地を移転し、新校舎新築
昭和15年	1940年	信砂尋常高等小学校となる
昭和22年	1947年	新学制により増毛町立信砂小学校と改称
昭和32年	1957年	体育館新築落成
昭和49年	1974年	新信砂小学校を廃校し、信砂小学校の分校とする
昭和51年	1976年	信砂小学校新信砂分校が閉校
昭和54年	1979年	増毛第二中学校との親子給食を実施

昭和61年	1986年	親子三代ふれあい教室を実施
平成7年	1995年	木造建築の新校舎落成
平成12年	2000年	開校100周年記念式典挙行
平成18年	2006年	閉校（舎熊小学校へ編入）

6 増毛中学校

年 代	出 来 事	
昭和22年	1947年	新学制により増毛小学校内に、増毛町立増毛第一中学校の設立が認可
昭和25年	1950年	弁天町4丁目（前増毛小学校跡地）に、増毛第一中学校校舎（木造2階建）新築工事に着手
昭和28年	1953年	新築の木造校舎並びに体育館完成（10月） 増毛高等学校、道立移管のため新校舎を増毛高等学校に譲り、再度、増毛小学校へ移転
昭和32年	1957年	暑寒沢村(当時)に、増毛第一中学校と別荘中学校を統合して、煉瓦造の新校舎工事に着手
昭和33年	1958年	増毛第一中学校と別荘中学校が統合して、増毛町立増毛中学校が創立
昭和42年	1967年	全道吹奏楽大会で優秀校
昭和47年	1972年	完全給食を実施
昭和48年	1973年	女子陸上部400mリレー活躍（管内大会、中部地方選手権、全道陸上選手権で優勝）
昭和51年	1976年	全国中学校陸上競技大会男子100m競走4位入賞
昭和58年	1983年	全国中学校作文コンクール「詩の部」入賞 全国学芸コンクール団体奨励賞受賞
平成9年	1997年	校舎改築第1期工事完成（教室棟）
平成10年	1998年	校舎改築第2期工事完成（体育館）
平成11年	1999年	校舎落成・開校50周年・統合40周年記念式典挙行
平成12年	2000年	校舎改築第3期工事完成（校舎周辺）

7 増毛第二中学校

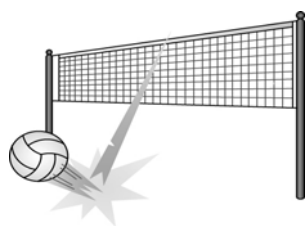
年 代	出 来 事	
昭和22年	1947年	新学制により、増毛町立増毛第二中学校創立 （舎熊小学校内2学級、舎熊青年会館内1学級、元阿分青年会館内2学級の分散）

昭和23年	1948年	石田露松が校舎建設資金に資財一金壹百万円を寄贈。新校舎建設着工。
昭和24年	1949年	新校舎落成
昭和46年	1971年	体育館の新築工事落成
昭和47年	1972年	完全給食を実施
昭和48年	1973年	全道中学校バレーボール大会男子の部優勝（全国大会出場）
昭和49年	1974年	全道中学校バレーボール大会男子の部優勝（全国大会出場）
昭和52年	1977年	開校30周年記念式典挙行
昭和57年	1982年	スクールバスによる通学実施
平成元年	1989年	新校舎落成
平成9年	1997年	開校50周年記念式典挙行
平成14年	2002年	全日本中学校陸上競技選手権出場
平成20年	2008年	閉校（増毛中学校と統合）

増毛第二中学校男子排球部の健闘

増毛第二中学校排球部の誕生は、昭和38年（1963年）であるが、猛特訓により昭和46年（1971年）には管内優勝、翌47年には全道4位と、めきめきその腕をあげていった。全道的にみても背の高さは恵まれているとは思えない二中男子の排球部の上達は、部員のたゆまぬ努力と根性によるものであった。

昭和48年（1973年）、遂に待望の全道制覇を果たして、第3回全日本バレーボール中学生選手権大会に駒を進めました。しかしながら、全国の壁は厚く2回戦で敗退しました。翌49年（1974年）も全道を連続制覇、北海道では二中の前に敵なしであったが、第4回全日本大会では再び2回戦で敗れました。3年生の卒業した



あとは、1年生部員のみで、2年間の成長に望みをつなぎましたが、その後の部員の数がぎりぎりの状態が続き全道への道もたたれてしまった。しかし、小規模中学校での健闘は今でも永く語り継がれている。

増毛第二中学校開校30周年記念誌「新潮」より

8 雄冬小中学校

年 代	出 来 事	
明治25年	1892年	真宗大谷派説教場の一隅で教育の場を仮設し、その後、岩尾尋常小学校雄冬分教場となる
明治34年	1901年	独立して、岩尾第三尋常小学校となる（岩尾尋常小学校は岩尾第一尋常小学校となる）岩尾村

		雄冬218番地（当時）に校舎を移転新築
大正5年	1916年	雄冬尋常小学校と改称
昭和14年	1939年	新校舎落成
昭和22年	1947年	新学制により増毛町立雄冬小学校となる 増毛第一中学校雄冬分校が併置
昭和25年	1950年	増毛第一中学校雄冬分校が独立し雄冬中学校となり、雄冬小学校に併置される
昭和40年	1965年	完全学校給食開始
昭和44年	1969年	学校給食全国表彰で文部大臣賞を受ける
昭和61年	1986年	新校舎落成
平成5年	1993年	「雄冬新聞」の永年の発行と地域への貢献に対し、シチズン・オブ・ザ・イヤー賞受賞
平成14年	2002年	閉校（増毛小学校、増毛中学校へ編入）

9 岩老小中学校

年 代	出来 事	
明治30年	1897年	岩尾尋常小学校分教場として創立
明治34年	1901年	岩尾尋常小学校より分離独立して岩尾第二尋常小学校となる
大正4年	1915年	移転改築の校舎落成
大正5年	1916年	岩老尋常小学校と改称
昭和8年	1933年	全校児童の学校給食を実施
昭和22年	1947年	新学制により増毛町立増毛第一中学校岩老分校として岩老小学校に併置
昭和62年	1987年	閉校（雄冬小中学校へ編入）

信砂御料小学校 [明治40年（1907年）～昭和52年（1977年）]

新信砂小学校 [大正9年（1919年）～昭和49年（1974年）]

歩古丹小学校 [明治25年（1892年）～昭和46年（1971年）]

増毛第一中学校 [昭和22年（1947年）～昭和33年（1958年）]

別苧中学校 [昭和25年（1950年）～昭和33年（1958年）]

10 増毛高等学校

年 代	出来 事	
昭和15年	1940年	北海道増毛町立増毛実科高等女学校設立 増毛尋常高等小学校に教室を設け授業を開始
昭和18年	1943年	北海道増毛高等女学校と改称

昭和23年	1948年	新制高等学校に設置転換
昭和25年	1950年	定時制課程設置
昭和28年	1953年	弁天町4丁目の新校舎（前増毛第一中学校譲受）に移転
昭和29年	1954年	北海道立高等学校に移管
昭和31年	1956年	オリンピック派遣選手壮行会 （池田三男・桂本和夫・浅井正選手）
昭和33年	1958年	本校校舎を北海道に寄附採納される
昭和36年	1961年	校舎焼失（2月）増毛小学校体育館を借用（3月）暑寒沢村（当時）に新校舎新築工事着工
昭和37年	1962年	増毛小学校より新校舎へ移転
昭和40年	1965年	山岳部が全国大会で優勝
昭和42年	1967年	山岳部が国体で優秀校となる
昭和57年	1982年	定時制課程を閉課
昭和62年	1987年	町民開放講座を開設
平成2年	1990年	創立50周年記念式典挙行
平成6年	1994年	全道学校新聞コンクール総合優勝
平成8年	1996年	新校舎落成
平成21年	2009年	新入学生募集停止
平成23年	2011年	閉校

〔社会教育・文化・スポーツ〕

1 戦後の社会教育

昭和20年（1945年）8月15日の終戦後、増毛町における社会教育行政及び社会教育関係団体が発足し、本格的に活動し始めたのは、社会教育法が公布された昭和24年（1949年）頃からとなります。

行政面では、教育委員会に学校教育と並び社会教育担当職員が配置され、諮問機関として社会教育委員とスポーツ振興法に基づく体育指導委員会が設置されました。

（1）青年団とその活動

それまでの青年学校が廃止され、各地で青年会が組織され、自主的な学習活動と地域性を活かして活発な青年団体活動が展開されてきました。学習活動は、各地区の青年会の交流も盛んになり、全町の連合青年団が誕生しました。その後、増毛町青年連合会は、増毛町青年団体連絡協議会「略称：増青協」と改称しました。

昭和30年代に入り、農村部では4Hクラブが結成され、続いて農協青年部、漁協青年部などの産業団体を母体とする青年組織が結成されました。

昭和33年（1958年）には、これらの4つの団体による「青年会議」

が結成されましたが、昭和36年（1961年）に相次ぐ青年の出稼ぎや転出者の増加により活動の継続が困難となりました。

以後、学校卒業者の都市への流出や在町する青年の農業、漁業離れや他の産業への就職者の増加などにより青年団体の活動は停滞していきました。

一方で、昭和46年（1971年）、市街地区の商工業に従事していた勤労青年の間で、「商工青年の集い」が結成されました。同年には、商工会を母体として商工青年部が結成されました。昭和52年（1977年）、コミュニティセンターと合わせて、勤労青少年ホームが完成し、勤労青年の活動交流の拠点として利用されるようになりました。

（2） 婦人（女性）団体とその活動

戦後、自主的な婦人会組織が地域毎に結成され、増毛町においても地域婦人団体が急速な勢いで誕生し、新しいスタイルの教養婦人会として発足していきました。

昭和27年（1952年）には、増毛町婦人団体連絡協議会が結成され、婦人大会、婦人運動会、料理講習会、奉仕活動などが行われていました。

昭和37年（1962年）から昭和40年（1965年）にかけて、市街地域の婦人サークルをはじめ、漁協婦人部、農協婦人部が結成されました。

昭和45年（1970年）の増毛町町制施行70周年記念行事には、「増毛音頭」が新しく作られたのを機に各地区の婦人部会員約200名が揃いの浴衣でパレードが行われました。

昭和47年（1972年）には、商工会の指導により商工婦人部が結成されました。

町教育委員会では、地域女性団体連絡会、漁協女性部、農協女性部、商工会女性部により男女共同参画推進協議会を結成し、女性参画の活動を推進しています。また、「さくらコミュニティ学級」を開設し、学習機会を設けています。

（3） 子ども会活動と支援

昭和20年代後半から、子ども会活動は町内の各自治会で子ども会育成委員会を組織し、自主的活動を進めてきました。

昭和40年代には、子ども会育成員連絡協議会が「下の句かるた」の継承と子ども会の発展をかるたを通して推進するため、「全町子ども会かるた大会」を主催しました。とりわけ、子ども会リーダーの育成に力が注がれ、「子ども会ジュニアリーダー研修会」では、多彩なプログラムが組まれました。

昭和53年（1978年）からは、町内小中児童生徒が参加し、年に一度、ゲームや出店での買物を楽しむ「希望の村」が開催されました。この「希望の村」は8年間続き、昭和61年（1986年）からは、子どもの王国「ご

だらっぺ王国」として活動が続いています。

(4) 文化団体とその活動

戦後の文化活動は、昭和24年(1949年)に増毛文化連盟が結成されました。加盟団体は、俳句、箏曲、日舞、茶道、写真などで11月3日の文化の日に文化発表、芸術文芸作品展示会を開催しました。

昭和36年(1961年)には、増毛町文化協会と改称し、囲碁愛好会、雄冬神楽保存会、民謡、書道などの団体が続々と加盟し、文化祭行事も華やかさを増していき、昭和45年(1970年)には、文化交流会が行われました。加盟する団体は徐々に増え、活動の範囲も町内だけではなく留萌管内での広域的な活動にも広がっていきました。

(5) 体育団体及びスポーツ活動とその支援

終戦後、スポーツ施設がほとんどない時代に野球、スキー、テニス、水泳などが盛んになってきました。昭和26年(1951年)には、増毛町体育団体連絡協議会が発足しました。

昭和43年(1968年)には、体育団体の再編成を試み名称も「増毛町体育協会」として再発足しました。昭和44年(1969年)には、体育協会事業として、「増毛町スポーツ功労者」の表彰と「体育館建設基金造成」として記念パーティを継続実施しました。

昭和48年(1973年)、待望の町立体育館が完成し、各スポーツ団体の活動や町民の健康増進に利用されてきました。また、舎熊にはスケートリンクが造成され、町民スケート大会が開催されました。その後、昭和55年(1980年)に温水プール、暑寒別岳スキー場がオープンし、町民はもとより町外からの利用もあり、日常のスポーツ活動の場となっていきました。

昭和59年(1984年)から留萌市・増毛町・北海道新聞が主催する「留萌～増毛間 さわやかマラソン大会」が国道231号のオロロンラインのコースと増毛町内の果樹園を回るアップルコースを会場に開催されました。

(※同大会は第19回大会で終了)

昭和62年(1987年)には、全国規模のスポーツ・イベントとして留萌管内を会場とする「日本海オロロンライン・トライアスロン国際大会」が開催され、国内最長のコースとして平成18年(2006年)まで継続開催されました。

また、少子化が進む中で各スポーツ少年団活動が地域及び学校指導者のもとで活発に行われ、スポーツ活動を通して地域の青少年の健全育成につながっています。



2 文化財

北海道の中でも古い歴史を誇る増毛町ですが、昭和53年（1978年）から教育委員会では明治初期から昭和初期にかけての歴史を物語る30カ所を町の史跡に指定したほか、増毛巖島神社を町有形文化財に、明治時代から伝承されている雄冬神楽を町無形文化財に指定しました。

(1) 国指定重要文化財と北海道遺産の指定

① 旧商家丸一本間家

旧商家丸一本間家は、明治初期に佐渡出身の本間泰蔵が増毛に移住し、明治15年（1882年）頃から建築が始まり、増築を重ねて全容が完成するまで20年の歳月を要した大規模な住宅兼店舗で、伝統的な町家づくりを基本として、四方を石造店舗や土蔵の不燃建材建築で中央の居宅部分を囲い、数度の大火にも焼失することなく現存してきました。創建者の本間泰蔵はここを拠点に呉服販売、酒造業、海運業、漁業等の事業を展開して道北一帯の経済に大きな影響力を持ちました。

平成9年（1997年）から調査、復元工事及び展示工事を施し、平成12年（2000年）には、北海道の有形文化財の指定を受け、平成15年（2003年）には、国の重要文化財の指定を受けました。



国指定重要文化財
旧商家丸一本間家

② 増毛小学校

町を見下ろす見晴町の丘には、昭和11年（1936年）に建築された増毛小学校があります。同校は、明治11年（1878年）、弁天町の高台（現、増毛町役場付近）に増毛教育所を設置したのが始まりです。現在の校舎は、弁天町から移転し建てられたものです。

現在の増毛小学校校舎は、木造2階建て約3,500平方メートルに中庭がある校舎として全国的にも貴重な大規模な木造校舎です。

この校舎も75年余りの永きにわたる風雪に耐えてきましたが、増毛高等学校の閉校後に増毛小学校は移転する予定です。



増毛小学校

医療の移り変わり

[明治期・大正期]

明治5年(1872年)の開拓使増毛派出病院が開拓使の肝入で創設されましたが、その後、公立増毛病院と改称され、明治21年(1888年)に弁天町3丁目に移転新築しました。明治33年(1900年)には、町制が施行され増毛町立病院となりました。医師の数は次第に増加し、明治40年(1907年)には14名となり、医療機関の充実を知ることができます。

留萌・増毛医師会の発足は、大正5年(1916年)ですが、中心となったのは元増毛病院の榎本芳二でした。彼は東大出身の医師であり、当時へき地へ赴任する例は少ない事例でした。

[昭和期]

昭和初期当時の開業医は、須崎医院(畠中町3丁目)、陽生堂医院(稲葉町2丁目)があり、昭和8年(1933年)、昭和10年(1935年)に風間歯科医院、湯口歯科医院が開業しました。

別荘で開業した山田(外科)は、後に畠中町へ、高塚(内科・外科)は舎熊で診療所を開きました。

戦後、住民の医療に密接な働きかけをしたのは、松本(産婦人科)、今野(外科)、木村(内科)、綿谷(内科)、風間(歯科)、湯口(歯科)、鯉沼(歯科)等です。

町立増毛病院は、昭和23年(1948年)北海道に移管され、道立病院となってから暑寒沢へ移転されました。昭和28年(1953年)に焼失しましたが、再建が急がれ昭和30年(1955年)には伝染病棟も併置されました。

この頃から人口の都市集中と過疎化が始まり、過疎地における医療の確保は極めて難しい状況になっていきました。

昭和37年(1962年)には、雄冬へき地出張診療所が開設されました。

昭和48年(1973年)、林医院が開院し、平成14年(2002年)までの30年間、内科医として地域医療に多大な貢献をしました。

一方、道立増毛病院の経営は、患者数の減少と病床利用率の低下が進み、道立として経営維持することが困難になっていきました。

[町立診療所の建設]

昭和54年(1979年)、道立増毛病院が出先機関の再編整備により、町立への移管が明らかになりました。

昭和55年(1980年)9月、本間町長(当時)は、第3回定例会で町立病院の建設計画を示しました。

昭和56年(1981年)2月、第1回定例道議会において増毛病院廃止関係

条例が提案され議決され、道立増毛病院の廃止が正式に決定されました。

診療所は、地域医療の拠点であり、町民の健康を守り、病気の予防・健康増進・治療・社会復帰などが期待されています。



市街診療所

警察と消防の移り変わり

【警察】

[明治期・大正期]

明治11年(1878年)北海道開拓使の札幌警察署増毛分署が設置され、一時的に弁天町の民家を借り、のちに永寿町4丁目(現元陣屋付近)に移転しました。その後、一時廃止となりましたが、明治13年(1880年)新布令により警察分署として発足しました。

明治15年(1882年)2月、札幌圏警察本署が設けられ、増毛警察署が誕生しました。同年6月には、札幌圏札幌始審裁判所に属す増毛治安裁判所が開庁され、明治16年(1883年)に監獄支署が開署しました。司法執行の三機関が揃った時点において、増毛はその相貌を一新していきました。

明治24年(1891年)には、札幌を始め増毛等全道の12警察署が廃止され、増毛警察署の所轄分署も廃され、新しい警部分署が設置されました。

[昭和期・平成期]

昭和17年(1942年)、留萌町が都市形態を整い始め、市制施行の気運があったことから増毛署は廃止となり、留萌警察署増毛警部補派出所となりました。

昭和20年(1945年)、司法、治安行政にも抜本的な改革が行われ、昭和22年(1947年)12月、増毛警察署は復活し、北海道庁増毛警察署となり、増毛一郡をその管区と定められました。

昭和23年(1947年)には、増毛警察署となり、昭和29年(1954年)に、町警察署を廃止し、警部補派出所となりました。

昭和36年(1961年)に旧庁舎を解体し、現在の元陣屋付近に平屋ブロックとして建造され、所長公宅も新築されました。昭和37年(1962年)4月、増毛警部補派出所の管区を増毛郡一円とする。

昭和43年(1968年)には留萌警察署増毛警察官派出所に、平成3年(1991年)には留萌警察署増毛警察官駐在所となりました。なお、現在、増毛町内には3つの駐在所が置かれています。

【消 防】

[明治期・大正期]

明治6年(1873年)に開拓者の一人の守野直次郎が増毛に移住しましたが、火消しの設備がないのを非常に憂慮し、明治7年(1874年)に私設守野火消組を結成しました。

明治27年(1894年)公設増毛消防組と編成替えし、一部制、組合定員31名に増員、腕用ポンプ1台を購入しました。その後も組織の拡大と受持区域の拡大、装備の拡充が進められていきました。

[昭和期・平成期]

昭和6年(1931年)、弁天町1丁目山形屋旅館より出火し大火となり、常備消防の必要性を痛感し、常備定員3名で第1部詰所に勤務常備消防が発足しました。同年に第1部と第5部を統合して本部とする編成替えが行われ、本部詰所並びに車庫、付属住宅を畠中町1丁目の第2火防線に新設しました。

昭和20年(1945年)終戦後の治安維持確保のため、消防に限定し警防団を増毛町消防と改組し定員170名、常備員12名となりました。

昭和22年(1947年)、増毛町消防が増毛町消防団に改組され、昭和23年(1948年)には、増毛町消防後援会が設立されたほか、消防組織法政令の施行により、それまで警察の指揮下にありましたが、消防本部、消防署、消防団が設置されました。

昭和37年(1962年)に消防団員の定員が160名に変更されました。

昭和44年(1969年)には、町総合庁舎竣工により、消防本部と消防署が現在地に移転しました。

昭和47年(1972年)、日本損害保険協会より救急車が寄贈され、救急業務が任意で実施されました。

昭和54年(1979年)、留萌消防組合と応援協定を締結したほか、石狩北部地区消防事務組合(昭和56年)、深川地区消防組合(昭和60年)ともそれぞれ応援協定を締結しました。さらには、全道規模で北海道広域消防相互応援協定を締結(平成3年)しました。

平成6年(1994年)、増毛消防創設120周年記念式典を挙行了しました。

平成8年(1996年)、全道消防操法訓練大会小型ポンプ操法の部で優勝し、横浜市で開催された第15回全国消防操法訓練大会に出場しました。

【救急業務】

救急車の寄贈を受け任意で行われていた救急業務が昭和50年(1975年)には、政令により救急業務の実施を指定され、消防署の実務となりました。

平成5年(1993年)、日本自動車工業会より救急自動車の寄贈、配備され、同年に消防の組織機構を改編し、救急救助係を新設し機能充実を図りました。

平成4年（1992年）、国家資格の「救急救命士」が創設され、増毛町では平成9年（1997年）に最初の救急救命士が配置されました。

平成12年（2000年）には、高規格救急自動車が配備され、救急機能の充実を図りました。救急車が任意出動した昭和47年から10年単位での出動件数は増加傾向にあります。増毛町では救急業務について、救命率の向上を図るため、救急体制の一層の充実に努めています。

【災害に強いまちづくり】

災害対策基本法に基づき、昭和37年（1962年）に増毛町地域防災計画が策定されました。

昭和63年（1988年）8月の集中豪雨による激甚災害指定を受けました。平成5年（1993年）の北海道南西沖地震の大規模な災害を教訓として、予期しない自然災害に対処するため、平成9年（1997年）に防災行政無線を整備しました。防災行政無線局の開設により、情報伝達体制の確保や住民の安全を守る諸活動への活用のほか、住民への行政関係情報の広報活動に活用することで住民への迅速な情報伝達が可能となりました。

今後も災害に強いまちづくりをめざして、大規模災害に備えた防災計画の見直しや防災用資機材の整備を図るなど防災機能の充実と強化を図っています。



保健衛生・生活環境の移り変わり

【保健活動】

1 健康一番館と保健事業

平成7年（1995年）に増毛町保健センター「健康一番館」が弁天町3丁目の青年研修所跡に完成しました。初山別村以南の留萌保健所管内では最初の施設です。

地域住民の健康教育、健康診査等の実施など、住民の身近で頻度の高い地域保健サービスを総合的に行う健康づくりの拠点で、施設内には福祉厚生課の業務のほか、地域包括支援センターや指定居宅介護事業所も開設しています

2 保健推進委員の活動

昭和61年（1986年）、町内各自治会に各種保健事業を円滑及び効果的に進めるために地域の推進役として保健推進委員が設置されました。

保健推進委員の任期は2年で、主な活動は各種検診の申込みの取りまとめのほか、保健推進員のつどいへの参加、健康カレンダーの配布、保健推進員研修会参加、保健事業アンケートへの協力などとなっています。

【生活環境の改善】

1 ごみとし尿処理

増毛町市街地におけるし尿の処理は、戦後間もない頃、増毛町厚生組合又は厚生委員会などの事業主体への委託業務でした。

昭和24年（1949年）、ごみ処理事業を町営事業としましたが、し尿処理は町営事業とすることが困難なため、各家庭において適切に処理することとしました。

昭和34年（1959年）、増毛清掃事務所が創立され、し尿の処理にあたりました。

昭和50年（1975年）、留萌市、増毛町、小平町とで共同処理のための事業組合「留萌市外2町衛生センター組合」を設立しました。昭和55年（1980年）3月、留萌市に現施設が完成しました。施設の運営経費は各市町からの負担金で賄われています。

平成5年（1993年）、町は合併処理浄化槽設置整備事業を開始し、下水道整備計画区域外の地区で合併処理浄化槽を設置する世帯へ整備費の補助を始めました。

平成12年（2000年）3月、公共下水道の供用が開始され、下水道の普及により、し尿処理量は減量傾向にあります。

2 ごみ処理の現状

ごみ処理は昭和20年代の初めからは、厚生組合等の事業体へ委託処理で、毎月10円（最低）から50円（最高）の範囲の費用を徴収しました。

昭和46年（1971年）頃より平成10年（1998年）まで、町は信砂御料地区の私有地を借り上げ又は買収するなどして、塵芥処理場に供していました。

昭和47年（1972年）6月、全町の塵芥処理の収集処理が開始され、昭和48年（1973年）4月に増毛町信砂御料塵芥処理場が完成し、埋立てによる処分が始まりました。

昭和51年（1976年）、ごみ回収回数を増やしましたが、家庭ごみの排出量を減量するよう呼びかけ、紙屑など燃えやすいものは各家庭で焼却処分するよう勧めました。このため、ドラム缶利用の焼却を希望する自治会へ配置しました。焼却炉の配置は自治会からの要請を受けて、平成年代初頭まで続きましたが、その後、焼却ガスによる大気汚染が危惧され、焼却炉の使用を禁じ、廃棄を進めました。

平成5年（1993年）、コンポスト（堆肥化容器）の設置補助事業が始まり、10年間で全世帯の半数をカバーしました。

本町のごみ処理は、焼却と埋立てによって行われてきましたが、ごみの排出量は年々増加傾向にあり、施設の処理能力にも影響し、ダイオキシン対策や施

設の整備や改善が必要となっていました。

平成10年（1998年）4月、昭和62年（1987年）まで設置していました2基の焼却炉を廃棄し、管理型一般廃棄物最終処理場（名称：増毛町一般廃棄物処理場）として改善整備し、本格稼働をしました。事業費は、約8億円で埋立て処理場、水処理施設、焼却炉、管理棟で構成されました。

ごみの減量化と資源のリサイクルを進めるため、一般ごみと資源ごみの分別収集が課題となっていました。

平成12年（2000年）10月、モデル地区（岩老・雄冬）を指定し、「7プラス1種類」の分別収集の試行が開始されたほか、町内各地区で説明会を開催し、趣旨の理解を図ることに努め、平成13年（2001年）4月、全町で「7プラス1種類」の分別収集が始まり、町指定のごみ袋による収集となりました。また、町内に200基のごみステーションが設置されました。

平成14年（2002年）4月、「一般廃棄物の広域処理に関する協定」を留萌市、増毛町、小平町で締結し、生ごみ・可燃ごみ・資源ごみ・（ペットボトル・びん）を「留萌市美サイクル館」に搬入処理されることになり、可燃ごみは同年12月から広域処理となりました。

平成15年（2003年）4月、ごみ収集が有料化となり、平成21年（2009年）には、留萌市外2町衛生センター組合が留萌南部衛生組合に改称されました。同年、現在の一般廃棄物処理場が供用開始から10年を経過して使用可能期限が近づいていることから、広域連携による新たな一般廃棄物処理施設の建設が進められました。

3 公営住宅

昭和26年（1951年）、公営住宅法が公布され、本町で初めての公営住宅10戸（旧木造1種）が現南永寿町2丁目に建設されました。

昭和27年（1952年）から

昭和33年（1958年）にかけて、競馬場跡（現見晴町）に中歌団地60戸が造成されました。

（平成4年10月までに全戸用途廃止）

平成11年度（1999年度）か

ら始まった公営住宅整備事業では、昭和38年（1963年）から昭和45年（1970年）までに建設された弁天団地（8戸）、栄町団地（48戸）、南島中団地（24戸）、暑寒2丁目団地（8戸）の88戸が老朽化や駐車スペース、冬季間の堆雪スペースが確保できないことから「すまいる団地」（70戸）として計画的に建替え整備が進められました。

◆この他に用途廃止となった公営住宅

団地名	建設年度	戸数	廃止年度
阿分団地	昭和29年 ～30年	4戸	昭和56年
別荘団地		4戸	昭和60年
舎熊団地		4戸	平成7年
畠中改良団地	昭和41年 ～43年	30戸	平成12年
暑寒改良団地		20戸	

◆町営住宅建設状況

団地名	建設年度	戸数	目的
阿分	昭和53年	5	福祉
南暑寒2丁目	昭和46～48年	36	一般福祉
南暑寒5丁目	昭和50～55年	48	一般福祉
暑寒共栄	昭和56～61年	33	一般
アップル	昭和63年、平成2・4・6年	48	一般
かもめ・改良	平成9～10年	44	一般
かもめ・単身	平成6～7年	18	一般
舎熊いちご	平成9年	4	一般
すまいる	平成11～16年	70	一般
計		306	



すまいる団地

4 上下水道

(1) 上水道

増毛市街地には暑寒別川の枝川が流れ、古くから生活排水の処理に利用されていたほか、良質の地下水に恵まれ、各家庭では汲み上げポンプや掘り抜き井戸で地下水を汲み上げて生活用水としていました。町の中には、共同のポンプ場や井戸屋があつて飲料水の供給や町内の交流の場にもなっていました。

昭和26年(1951年)12月、増毛上水道事業が開始(通水開始)されました。これらの工事は、昭和30年(1955年)に竣工しました。

◆昭和30年代以降の水道整備

実施年度	事業内容
昭和39年(1964年)	雄冬簡易水道・岩老簡易水道事業開始
昭和49年(1974年)	阿分簡易水道事業開始
昭和50年(1975年)	新浄水場(浄水施設・取水施設)竣工
昭和57年(1982年)	別苺簡易水道事業開始
平成6年(1994年)	信砂地区拡張事業
平成7年(1995年)	新配水池竣工 暑寒沢地区拡張事業
平成8年(1996年)	市街地区配水管布設替工事竣工 湯ノ沢地区拡張事業竣工
平成13年(2001年) ～16年(2004年)	雄冬・岩老・阿分・別苺簡易水道配水布設替工事竣工
平成22年(2010年) ～24年(2012年)	導水管布設替え工事

(2) 下水道

町の公共下水道整備事業は、平成6年度(1994年度)から平成25年度(2013年度)までの計画で市街地の155ヘクタールを対象に事業が進められ、平成8年(1996年)別苺古茶内地区に終末処理場施設工事に着手し、平成12年(2000年)に終末処理施設「増毛町下水道管理センター」が完成し、整備完了区域から供用を開始されました。

この間、公共下水道事業について、住民説明会を開催し、受益者負担金を1平方メートル172円としました。

社会福祉の移り変わり

【明治期・大正期・昭和前期の福祉活動の変遷】

明治初期には別荘の医師石井織之助によって、貧困な住民が無料で治療を受けたと伝えられています。

明治40年代には、暴風雨により船に大きな被害を受けたとき、特に甚大な損害を受けた者に対して、炊き出しその他で、12石8斗1升（256円20銭）の米と諸費82円60銭を町費で支出したほか、これを上回る篤志者の173円60銭の寄附がありました。

また、地域の富裕者や漁場の親方が救荒米を準備しておく例がこの沿岸の特徴でもありました。明治41年（1908年）の鱈釣船遭難事件の際には、赤十字社に関係した地元の人々が貧困者への慈善をなしていました。

増毛では、藤原筆吉らが赤十字恩賜財団会員として活動していました。

【昭和後期（戦後）の社会福祉制度の変遷】

従来からの救済制度から国家的責任における社会福祉事業へと発展したのは第二次大戦以降でした。

戦後の混乱期には、外地からの引き揚げ者は、仕事はもとより住居にもことかく毎日で、役場には民生係がおかれ、混乱期の福祉事業を掌握していました。

昭和25年（1950年）頃には町内に次の公職者が配置され業務が進められていました。

児童福祉審議員	20名	民生委員	21名
社会厚生委員	10名	民生員推薦員	25名

【老人福祉施設】

（1）養護老人ホーム

昭和38年（1963年）12月、中歌山の上（現、見晴町）に増毛町立老人ホーム明和園が開設され、養護老人ホーム事業が開始されました。

昭和47年（1972年）12月末では増毛町の老人（60歳～97歳まで）は、全人口の約16%を占めていました。

留萌管内唯一の養護老人ホームで他市町村からの入所者も多くいます。当初は定員100名でしたが、現在は85名の定員となっています。



(2) 特別養護老人ホーム

特別養護老人ホーム（介護老人福祉施設）は、常時介護が必要で自宅での生活が困難な人が、日常生活上必要な介護、機能訓練、療養上の世話を受けるための施設で昭和55年（1980年）12月に開設されました。既設の養護老人ホームとは廊下でつないだ施設です。

開設以来、入所率は100パーセントで、常に待機者がいる状況です。

平成12年（2000年）4月、介護保険制度が導入され、介護認定審査会で要介護者と認定された人が入所されています。

(3) 老人福祉寮「やすらぎ荘」

昭和53年（1978年）、独居老人が明るく楽しく生活を送れるように、北海道の老人福祉施設整備事業により施設が完成しました。

入居者6名とヘルパーの住居と共同炊事場、浴場、食堂、娯楽室が設けられました。施設の愛称は「やすらぎ荘」と呼称されています。

(4) 増毛町デイサービスセンター

平成2年（1990年）、明和園内にデイサービスセンターが設置され、通所によるサービス（健康チェック、日常動作訓練、食事提供、入浴、家庭介護者教室（生活・医療・福祉等の開催・送迎）を提供し、自立生活の助長、社会的孤立感の解消、心身機能の維持向上を図り、家族の人の身体的精神的な負担軽減を図ることを目的としています。定員は1日15名です。

平成12年（2000年）4月からは介護保険でサービスを受けられるようになり、明和園の休日以外は毎日開所しています。

近年は、民間事業の開設もあり、利用者が減少している状況にあります。

【地域福祉とボランティア】

(1) 高齢者福祉

本町は平成年代になって高齢化率が既に15%を超えて高齢化社会になっていました。昭和55年（1980年）以降の高齢化率は右の表のとおりです。

本町は、北海道平均を上回るスピードで高齢化が進行しています。

町では、昭和30年代後半から

50年代後半にかけて、高齢者のための福祉施設等の設置と整備を進めてきました。

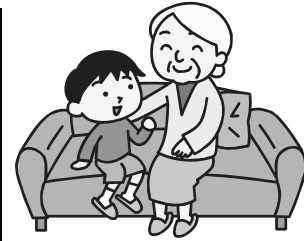
■高齢化率の推移

調査年		増毛町	北海道
昭和55年	1980年	13.8%	8.1%
昭和60年	1985年	16.9%	9.7%
平成2年	1990年	22.3%	12.0%
平成7年	1995年	27.7%	14.8%
平成12年	2000年	32.7%	18.2%
平成17年	2005年	35.2%	21.4%

（資料：国勢調査）

■老人福祉施設の設置・整備状況

設置年度		施設名
昭和38年	1963年	町立明和園(養護老人ホーム)
昭和53年	1978年	町立老人福祉寮「やすらぎ荘」
昭和53年	1978年	町立舎熊寿の家
昭和55年	1980年	町立明和園(特別養護老人ホーム)
昭和56年	1981年	町立老人福祉センター
平成元年	1989年	デイサービスセンター
平成10年	1998年	在宅介護支援センター



(2) 児童福祉

昭和23年(1948年)に児童とその福祉に関する総合的基本法として児童福祉法が制定され、平成9年(1997年)には大幅に改正されました。

昭和46年(1971年)には児童手当法が定められ、児童手当が支給されました。

平成4年度(1992年度)から増毛町の少子化対策として、出産祝い金等を支給していました。出産祝い金は、二人以上の子を養育し、新たに子どもを出産したときに30万円、第三子以降の児童が小学校に入学したときに20万円を支給していましたが、平成16年度(2004年度)で制度が廃止されました。

保育対策については、「保育」の捉えかたが時代とともに変化しています。

改正前の児童福祉法では、保育とは「乳幼児に対する保護と育成を併せて行うこと」「家庭において保育に欠ける場合に市町村長はそれらの児童を保育所に入所させて保育しなければならない」とされていましたが、平成9年(1997年)の改正後は、「保護者の委託を受けて」となりました。

本町では、同法の規定に基づいて、別荘保育所(昭和41年:1966年)、信砂へき地保育所(昭和42年:1967年)、舎熊保育所(昭和44年:1969年)、市街保育所(昭和50年:1975年)が順次設置されました。

平成9年(1997年)には、増毛保育所を改築し、既設保育所を統合した「増毛町立増毛保育所」(あっぷる保育所)が完成しました。

平成11年(1999年)には、「いちごクラブ」を結成し、母と子が一緒に様々な行事に参加することで、育児の知識を得る機会の提供を始めました。



アップル保育所

翌年度からは、「増毛町保育所地域子育て支援センター」を開設し、保健師の協力を得て子育て相談の中心的役割を果たしています。

平成14年度(2002年度)からは、増毛町放課後児童健全育成事業により定員20人の学童保育を開設しました。平成13年(2001年)に老人福祉センターの一室を借り、ボランティアの指導員による学童保育が端緒となり、現在は文化センター2階で開設されています。

(3) 社会福祉協議会

昭和26年(1951年)、社会福祉事業法が制定され、社会福祉事業を総合的に進めるために、増毛町社会福祉協議会が設立されました。

昭和58年(1983年)、「社会福祉法人」の認可申請を厚生大臣へ提出しました。設立当初の会員数は、50名前後でしたが現在は300名を超える会員数となっており、老人福祉センター内に事務所を置いています。

主な事業活動として、ふれあい広場の開催、除雪サービス、シルバースポーツ大会の開催、共同募金、歳末助け合い募金、尊人大学の開催などがあります。

【社会保障】

(1) 国民健康保険

昭和13年(1938年)制度が発足しました。増毛町は、昭和23年(1948年)に事業を開始し、留萌管内では最も早く保険者となりました。

昭和34年(1959年)に新国民健康保険法が公布され、昭和36年(1961年)4月から完全実施されました。

制度発足以来、我が国の医療保険制度の中核として、地域医療の確保と住民の健康増進に重要な役割を担ってきました。しかし、現状は加入者の高齢化や保険税負担の構造的問題を抱え、人口の高齢化や疾病構造の変化、医療費の増加などにより保険者においては厳しい財政運営を余儀なくされています。

増毛町では、国民健康保険事業の充実のため、①特定健康診査の受診PR、②国民健康保険制度の周知徹底、③医療相談や保健事業の実施、④各種定期検診等の呼びかけや予防事業、⑤保険税の収納率向上と合わせて医療費の適正化対策を推進しています。

(2) 介護保険

平成9年(1997年)に介護保険法が成立し、平成12年(2000年)から施行されました。翌年に在宅介護支援センターが保健センター「健康一番館」内に開設されました。

高齢化の高い増毛町では、介護が必要となっても、住み慣れた家や地域で安心して生活が送れるように、介護サービスや在宅福祉サービスを提供できる福祉のまちづくりを進めてきました。

平成18年(2006年)、介護保険法の改正に伴い、「在宅介護支援センター」から「地域包括支援センター」へ変わり、地域住民の心身の健康維持や生活の安定、保健・福祉・医療の向上、財産管理、虐待防止など様々な課題に対して、地域における総合的なマネジメントを担っています。